1949年９月17日第三種郵便物認可　毎月10日発行　第686号（通巻1190号）　定価１部40円

創立1880年
YMCA
東京YMCA
2011 6 月号
発行所　公益財団法人東京ＹＭＣＡ　発行人　廣田光司
135-0016　東京都江東区東陽2-2-20　電話　03-3615-5562
URL http://tokyo.ymca.or.jp

東京ＹＭＣＡの使命
東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

震災から３ヶ月以上経ちましたが、復興への道のりは遠く、悲しみは癒えるどころか、より現実化し、複雑化したかに見えます。今後の支援活動のあり方について、本会評議員の山崎美貴子さんにお話を伺いました。

山崎美貴子さん

本会評議員。明治治学院大学教授・副学長、神奈川県立保健福祉大学学長を歴任。1986年から、東京ボランティア・市民活動センター所長として、精力的にボランティア活動等を推進。国の福祉政策づくりにも参加。『社会福祉援助活動の展開』（岩崎学術出版）、『ボランティア活動のひろめ方』（第一法規）など著書多数。

東日本大震災　今後の支援を考える
寄り添うこと、つなぐこと

全国規模でネットワークを組織

震災直後に現地へ行きました。とにかく悲惨で、複雑で、困難を極めていました。私は、阪神大震災の時も新潟の時にも現地に参りましたが、今回は様相が違いました。一つ二つの団体では支援しきれないと思ったので、３月14日、現地に入っていた団体を集めて、「東日本大震災支援全国ネットワーク」を立ち上げました。現在では５６０団体が加盟しています。このネットワークは、団体を横につなげるだけではなく、９つのプロジェクトチームを作って機能分化しています。「情報チーム」「資金チーム」「広報チーム」のほか、政府のボランティア連携室と協議する「制度チーム」や、ボランティアのためのガイドラインを作成する「ガイドライン・チーム」などがあります。（http://www.jpn-civil.net）

◇　◇　◇

「制度チーム」の協議のため、政府と、現地自治体の方と一緒に、仮設住宅のことなどを話し合ったときのことでした。現地自治体の方は、缶詰やレトルト食品などをビニール袋に詰めて持ってきて、「これを３ヶ月間毎日食べるということがどういうことか分かりますか」と話しました。こういう生の情報に触れ、顔の見える関係を作ることが非常に大事です。現地のニーズをよく把握した上で、お互いに役割分担をし、支援とマッチングさせていくことが肝要です。

ニーズを発見し支援とつなぐ

しかし、現地の方は非常に耐えておられて、簡単にご自分の気持ちや要望を口に出して語りません。「何かお手伝いしますか」と尋ねても、「あちらに一人暮らしの方がいる」などとおっしゃり、ご自分のことは言わない。ご自宅の床下や側溝に泥がたまっていて、ピアノも倒れたままで、２階だけで暮らしていても、何も要求しません。こちらから具体的にどんな手伝いができるか、そうしないとどう困るかを示さないと、なかなかご自分から「こうしてください」とはおっしゃいません。ニーズを顕在化することは、とても難しいことです。

子どもですら耐えています。「何か必要な物ある？」と１回聞いたくらいでは何も言いません。「何でも言っていいよ」と何度か言うと、「本当に言ってもいいの？」って５回くらい言ってから、私の耳元に手をあてて「オモチャが欲しい」と小さな声で教えてくれました。買ったばかりの大事なオモチャが流されてしまった。親にも言ってないけど、悲しいと。

私は、３月11日の地震の時、川崎のボランティアグループと一緒に作業をしていました。このグループは、介護の必要があるのにその申請をしないでいる高齢者を見つけて、地域につないでいくという活動をしています。多くの高齢者が介護サービスの申請をしない、申請しにくい、あるいは申請することを良しとしないでいます。ですから、そのニーズを発見する、そして地域につないでいく、地域を耕す活動が必要です。

人は時に、自分の状況を客観視して、第三者に気持ちを伝えることが困難になります。一緒に考えてくれる人の存在に気づき、自分の気持ちを声に出してみようと思うきっかけが必要です。声に出すことで分かち合いの輪が広がり、市民活動の入り口となります。

被災地でも同じです。ニーズを掘り起こし、支援とマッチングさせていかねばなりません。難しいことですが、一方的でないコーディネーターが必要です。

心・怒り・無念さを分かち合う

そのためにはまず、被災者に寄り添う、気持ちを分かち合うことから始めなければなりません。とにかく大勢の方が亡くなって、命も生活も破壊されてしまいました。これに寄り添う必要があります。泥かきや家の掃除は、その手段、きっかけです。泥かきは重労働ですけれども、その向こうにある人の心、怒り、無念さなどを分かち合うことが大事です。ボランティアは、家を片付けるため、「このテーブルは捨てますか、どうしますか？」と聞きます。けれども家の方は、その傾いたテーブルについて語り出します。「ここにおじいさんが座っていたんですよ。これを見るとね、おじいさんの姿が目に浮かぶ。おじいさんの姿が染み込んでいる気がする」と。「じゃあ洗ってみますか」と言ってボランティアはそのほとんど壊れた泥だらけのテーブルを洗います。木目が見えるくらいきれいになってくると「じゃあ、やっぱり捨てないでおきます」となります。生活の一品一品ですから、逡巡する時間がいります。

〝思いで探し隊〟という活動があって、写真などを洗って持ち主に渡していまえ。おばあさんが、コンクリートに写真を並べて泣いていました。「やっと写真だけが戻ってきたのよ」と言って、泣きながらその写真を撮った時のことを語り出しました。ボランティア活動は、一人の市民が同じ生活者として、その辛さに寄り添って、一緒に生きようとすることです。その困難を分かち合うことです。

避難所で、炊き出しを一緒に作って、一緒に食べている内に話しが始まることもあります。温かなトン汁を食べていると、「ああ、久しぶりに食べた。おいしいい」と話し始めます。「実はね、私、ずっと食欲がなくて、おにぎりは見ただけでうんざりするから、何も食べてなかった」と。「毎日おにぎりばかりじゃねしえ。食べたくもなくなりまりすよね」と言うと、「実は夜も眠れていない」と話し出します。「体は横になっていても、眠れないんでうですよね。誘眠薬は要りますか？」ときくと、「夜になると枕元に父ちゃんが出てくるから眠れない」と。漁師をしていたご主人と息子さんは、漁に出たまま帰ってこなかった。息子さんは遺体も見つかっていない。ご主人のお葬式も出せない。海はもう見たくない、海だけは見られない、と、その筆舌に尽くしがたい思いをポツリポツリと話していく。産業も興していかねばなりません。地域の持っている「地域力」を何とか活用して、コミュニティーが力づくようにしなければなりません。

仮設住宅の中に生活支援センターを作る方向にあるかと思います。仮設住宅50戸につき1ヶ所の集会所を作る方向で検討されているのではないかと思います。そこに相談所を作り支援していければと思います。

ＹＭＣＡは全国組織ですから、全国に散らばっていった避難民を支えることもできると思います。何より孤立させないことが大事です。家財一切失った方々ですから、これから夏物が必要になります。地域になじむように、就労支援、学習支援、遊びの提供なども必要です。

最近、現地の旅館を活用したボランティアパックを始める旅行会社や、ボランティア休暇制度を設ける企業なども出てきました。さまざまな知恵を出し合って、皆で長期的に支援していかなければならないと思います。

東京ＹＭＣＡでは、石巻市へランタンを送る活動をした。写真は万石浦中学校。
（２面参照）

地元が主体性を持ち立ち上がる

これから生活再興期に入っていけば、より生活支援にかかわることになります。地元が主体性をもって、地域が立ち上がれるようにし（聞き手　広報室）

すべての人を一つにしてください

子どもの成長と自然

『部屋のよごれた空気の中にじっと座らせておくようなことはしないで、まいにち野原の真ん中に連れていってやることにしよう。そこで走り回って遊ばせることにしよう。１日に１００回転んでもいい。それは結構なことだ。それだけ早く起き上がることを学ぶことになる。快適な自由は多くの傷を償うものとなる。私の生徒はしょっちゅう怪我をするだろう。それでもいつも快活でいるだろう』（ジャン・ジャック・ルソー「エミール」より）

今年も夏がやってきました。ＹＭＣＡは90年前かて伸びる」のです。キャらずっと子どもたちの成ンプは子どもたちに「快長を願って組織・教育キ活」を提供し、その営みャンプを実施してきまし の中で青年であるリーダた。長い歴史の中で多くーをも成長させる魔法の道具です。

子どもたちの成長のためには「森」の持つ神秘性（スピリチュアリティー）も大きな要素です。私たちは子どもたちの傍らに寄り添うことしかできませんが、上から大いなる力が子どもたちを導いてくれることを信じて今年も森に川に野原に出かけていきます。

（総主事　廣田光司）

赤▽三角

まもなく夏季プログラムが始まる。この時期になるとボランティアリーダーたちは、子どもたちの喜ぶ姿を思い浮かべながら準備に余念がない。▼人が成長していく過程で身につけなければならない価値はたくさんあるが、ＹＭＣＡはその中でも「CARING（思いやり）」「HONESTY（誠実さ）」「RESPONSIBILITY（責任感）」「RESPECT（尊敬心）」の四つに注目し、様々な活動を通して子どもたちに伝えている▼ＹＭＣＡでは「子供」とは表記せず「子ども」と書く。「供」という字は従者・お供をするなどの意味があり、「子供」は大人の従者としての存在が強く表されている。私たち大人は子どもの存在を普段どのように見ているだろうか？▼ＹＭＣＡのキャンプはボランティアリーダーと呼ばれる大学生を中心とした18歳以上の若者で運営されている。彼らは子どもを自分の従者と見ることはない。子ども以上もしかすると大人未満のリーダーたちが、子どものキャラクターを純粋に尊重しているからではないだろうか。子どもの成長、出来ないことが出来る様になった時の喜びなどを共に分かち合うことを楽しみにしながら今日もＹＭＣＡに通ってくる。きっとリーダーにとって子どもは、一緒に成長していく仲間のような存在なのかもしれない。▼子どもたちと共に成長し続ける、そんな活動を創り続けたい。

（山手センター　堀雄二）

We build strong kids, strong families, strong communities. ＹＭＣＡは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。